

「ドン・ジュアン」の解釈について

徳 村 佑 市

モリエールの「ドン・ジュアン—名石像の饗宴」(Molière : Dom Juan ou le Festin de Pierre) は1665年 2月15日、パレ・ロワイヤル座で初演された。初演は成功で復活祭までに15回演ぜられたが、どういうわけかその後上演を中止している。そして16回目が演ぜられたのは1847年1月15日であった。この作品は非常に難解でその解釈もいろいろあるようであるが、私はここでは小場瀬卓三氏の解釈を検討しつつこの問題に入って行きたい。

小場瀬氏はその著「フランス古典喜劇成立史」の中で「ドン・ジュアン」の解釈に言及して次のように述べている。即ち「モリエールが同じ題材をとりあげながら、筋の発展においてはチコニーニにも、デリベルトにも、ピアンコレリにも、又モリナの原作にも依らずに全然新奇なものを考えたのは、時間がなかったとか、見物を面白がらせようとか、或は新趣向を出して大向うを驚かそうなどというけちくさい考えから生れたことではなく、ドン・ジュアンというスペイン貴族に仮託して、当時のフランス貴族階級の頹廢した破廉恥な姿を描こうという彼の作意から生じた必然的な結果である。」と述べ当時の貴族階級の墮落についてさまざまの実例をあげてから、「以上の如く当時のフランスの風俗史を見てくるならば、モリエールが「ドン・ジュアン」において如何に当時の貴族階級の忠実な肖像画を提供しているかがわかるであろう。スペインの貴族である筈の彼が、ヴェルサイユの廷臣と全く同じ服装(第二幕第一景にあるその描写を見よ)をしているのは蓋し当然であって、ドン・ジュアンの伝説は結局この肖像を描くための框を与えているにすぎないのである。彼の作意が全くこの肖像を書くにあったことは、第一幕でスガナレルが「性のよくない、偉い殿様ほど世に怖い代物はない」といっていることに徴しても明白であろう。

而して作者の意図がそこにあったとするならば、彼の追うた筋は極めて論理的である。快楽の飽くなき追求、これに対して加えられる非難に向って自己の行蹟を合理化せんがためのエピキュリズム、その非難の道徳的根源である神を否定せんがための瀆神行為、最後に自己の一切の非行を蓋わんがための偽信——これらは17世紀のフランス上流社会の放蕩者達が辿った一般的徑路であった。モリエールはこの順序に従ってドン・ジュアンの性格を発展させ

る。即ち第一幕及び第二幕においてはドン・ジュアンはまづ何よりも漁色家である。このあくなき女性追求者にとっては世界も狭ますぎる。彼はアレクサンドル大王のように征服すべき別の世界があって欲しいと思う。社交生活によって洗練された趣味を持っている彼は肉体的情欲の満足だけではなく、女の羞恥心、慎しみ、徳操を一步一步打ち破ってこれを墮落させる精神的情欲をもそれ以上に欲している。彼はこの肉体的精神的放蕩のためには神をも畏れず（ここでは彼の無神論はまだ全貌を現さず、彼は単に懷疑論者であるにすぎない。）、人殺しをおそれず（彼は爵士を殺した）、人の迷惑をかえりみず（彼は許婚の夫婦を見、嫉妬からその女に恋を感じ、これを奪おうとする）、平気で嘘をつき（彼はエルヴィールに旅に出たのは悔悛のためだと伴る）、恩義をふみにじる（彼は命の恩人であるピエロの女を誑そうとし、ピエロが怒るとこれをなぐる）。第三幕はスガナレルとドン・ジュアンとの滑稽じみた神学論義に始まり、貧者に金をやっって瀆神行為を行わせようとする場面を経て石像の招待に終る。即ちこの幕は主として無神論者としてのドン・ジュアンを描くために用いられている。その間に彼が勇敢な剣士であることを示す場面が入るが、コンデ大公が名将であり、ピッシー＝ラビュタンが優れた決闘家であったことを思えば、破廉恥なドン・ジュアンにかかる一面のあることは不思議でない。第四幕において彼は借金倒しとして、神聖なるべき家族的羈絆の蹂躪者として表現される。放蕩息子が社会からも家からも爪弾きされたのである。第五幕においてモリエールは彼を偽信者とすることによって、その頽廢を最高点に到らしめ、彼のタブロオを完成する。ドン・ジュアンは信仰を装って善良な父親を欺し、ドン・カルロスを追い払い、これからはこの流行の悪徳を利用して大いにしたい放題をするのだと宣言する。

このように見て来るならば、一見筋に統一のないかの如くに見える『ドン・ジュアン』は理路整然としており、現実のドン・ジュアンの悪徳の進行と合致していることがわかるであろう。それがレヴィユ式に場面を組合せながら、然もちゃんとした統一感を与え、現実感を与える所以はここにあるのである。」と述べている。このように小場瀬氏はモリエールは「ドン・ジュアン」では当時のフランスの貴族階級を攻撃したとするのであるが、その攻撃の仕方については「モリエールはドン・ジュアンにおいて、当代の腐敗しきった大貴族の肖像を克明に刻んだとはいえ『タルテュッフ』の場合と違って、この喜劇を所謂問題劇にはしなかった。これは宮廷の大貴族を正面からやっつけることは危険であると感じたからであろう。ドン・ジュアンの所行に対する批判は真面目な形においてドン・ルイ及びドンヌ・エルヴィー

ルの口を通して、巫戯けた形においてスガナレルの口を通じて、最後に皮肉な形においてドン・ジュアンその人の口を通して行われているけれども、彼らは何れも『タルテュッフ』のクレアントが作者の代弁者であるような形においては作者を代弁していない。彼らは代弁者である以上に作中の人物であり、モリエールは彼らを自己の代弁者とするために、その作中人物としての真実性を聊かなりとも犠牲に供しようとはしなかった。これによって彼は作品の芸術性を益々昂めたばかりでなく、貴族をやっつけるという大胆な行為に対して巧みな煙幕を張ったのである。」と説明している。

そしてこの小場瀬氏の解釈はモリエールが「ドン・ジュアン」で宮廷貴族を攻撃したとする点で、ミシュレが「フランス史」(Michelet: Histoire de France t. XII)で述べている意見に近いように思われる。

この小場瀬氏の解釈には大変すぐれた点が認められる。それはモリエールはドン・ジュアンというスペイン貴族の姿をかりて当時のフランスの貴族階級の姿を活写したとする点であり、このことは氏も指摘する通り第二幕第一場で、スペイン貴族である筈の彼が当時のヴェルサイユの廷臣と全く同じ服装をしていることについての描写があることを見てもうなづけるのである。小場瀬説のすぐれている今一つの点は、レビュー式に場面を積み重ね、一見筋に統一を持たないように見えるこの作品も、実は極めて論理的であって、快樂の飽くなき追求、これに対して加えられる非難に向って自己の行蹟を合理化せんがためのエピキュリスム、その非難の道徳的根源である神を否定せんがための瀆神行為、最後に自己の一切の非行を蓋わんがための偽信——という風に現実のドン・ジュアン、当時の貴族階級に見られたドン・ジュアンの原型たちの悪徳の進行と全く一致した筋の展開を持ち、それがレビュー式に場面を組合せながらこの作品がちゃんとした統一感と現実感を持つ所以であるとなす点である。

このように当時の貴族階級を描いたとする点では小場瀬説はすぐれた点を持っているのであるが、そこからすぐにモリエールはドン・ジュアンの姿をかりて当時の宮廷貴族を攻撃したとする点では小場瀬氏の解釈に疑問を抱かせられる。「タルテュッフ」ではモリエールが偽善者たちを攻撃していることは誰の目にも明瞭であるが、この作品ではそれは余り明瞭ではないのである。しかしこれについての検討は後段に譲るとして、ここで今一つ疑問になるのは、もしもモリエールがドン・ジュアンの姿をかりてその原型である宮廷貴族を攻撃したとするならば、第三幕第一場に見られるような医者への嘲弄と医学への不信の意見を何故自

分が攻撃する相手に与えたかという点である。この医者への嘲弄と医学への不信はモリエール自身の意見の一つであって、1665年の「ドン・ジュアン」や「恋の医者」に始まり、死ぬ前の「気で病む男」で頂点に達したものであるが、この自分の意見の一つを自分が攻撃する対象に賦与したという点で疑問を持たざるを得ないのである。これに対してドン・ジュアンは作中では独立した人物であるから、それが攻撃の対象となっているとはいえ、それに作者自身の意見を与えても何らおかしくないとする見解もあるだろうが、第三幕第一場の半分ほどをついやしてドン・ジュアンとスガナレルが医者と医学をこきおろしているのを見ると余り釈然とはしない。

以上が小場瀬氏の解釈に関した部分であるが、以下少しくこの作品について検討して見よう。「ドン・ジュアン」では主人公ドン・ジュアンを批判する側の人間として三人の人物が登場する。それはスガナレル、ドン・ルイ、ドンヌ・エルヴィールの三人であるが、スガナレルはドン・ジュアンの従者として主人に批判を抱きながらもその前に出ると逃げ腰で批判する。冒頭第一幕第一場では彼はギスマンに向かってドン・ジュアンの女性征服者としての面にふれながら次のような批判を述べる。

「……だが用心のため内々でお前に教えておくが、俺の主人のドン・ジュアン様はこの世がはじまって以来の大悪党、気違いの犬畜生、悪魔、トルコ人、異端者で、天国も地獄もお化けも信じないで、この世を正真正銘のけだもの同然に送るお方、エピキュロスの豚、まごうかたなきサルダナパールで、人の忠告には耳をとぎし、俺たちの信ずる物は皆愚の骨頂だと思っているようなお方だ。お前の御主人様と結婚したとお前はいうが、あの方ときたら色恋のためなら何でもやりかねない。そして御主人様と一緒に前やその犬猫までも嫁に貰いかねないんだぜ。結婚なんて少しも気にもならないのさ。別嬪さん達をつかまえる毘がそれで、誰でも彼でもお構いなしに結婚してしまうんだ。奥さん、お嬢さん、町娘、百姓女、誰であろうと構わないんだ。で、いろんな場所で結婚した女の名を一々あげたら日が暮れてしまうだろう。お前は話をきいてびっくりして顔色をかえているが、まだまだ上っ面の粗描にすぎないんだぜ。その肖像をえがくとなればもっと筆数があるだろうさ。いつか天罰が下るにちがいない。あんな人に仕えるくらいなら悪魔の手下になった方がましだ。あんまり恐いことを見せつけられるので、どこかへ消えうせてもらいたいくらいだ。性悪な偉い殿様ほど世に恐いものはない……」

そして又第一幕第二場ではドン・ジュアンに向かって、彼が教会の定めた結婚という聖なる

掟をふみにじり、神を嘲弄しているといつて批難し、リベルタンはよい最後をとげないとして次のように批判する。しかしそれが又スガナレル流の批判である。

「私は又旦那様に申し上げているのじゃございませぬ。飛んでもない話で。あなた様にはあなた様の理由がおありでしょう。でも世の中にはちょございな無作法者がいるもので、その方が柄にあつていると思ひこんでいるために神様を信ぜず、不信心を気取る奴があります。私がもしそんな主人を持ったら、面と向つてははっきりこういつてやりますよ。『神様をそんなにからかつていいものでしょうか。一番有難いものをあなたのように馬鹿にしてふるえませぬか。全くあなたは虫けら野郎でちびっちょのくせに（最前のあの主人にいつているのでございませぬよ）、すべての人があがめているものを笑いものにしようといふのですか。身分が高いからといつて、金髪のよく縮した鬘をかぶつてゐるからといつて、帽子には羽根飾をつけ、金ぴかの服を着、真赤なリボンをつけてゐるからといつて（旦那様にいつているんじゃありませぬよ、別口の方で）、あなたはそれだけ人よりも利口で、何をしたつて構わなかつし、それに誰もあなたに文句はよういわないと思つてゐるのですか。私はあなたの召使ひですが、これだけは知つて頂きたいもので、神様は遅かれ早かれ不信者を罰するし、悪い暮しをすれば碌な死に目には会えないし、それに……』」

そして又彼は主人のドン・ジュアンが何物をも信じないといつて責める。天国も地獄も悪魔も来世も、それからこれはいかにもスガナレルらしいがお化けも信じないといつて批難する。又忠告に來た父親の言をきかないといつて批難するがこれもへつぱり腰のスガナレル流である。又第五幕でドン・ジュアンがさまざまな悪徳の上に更に偽善のそれを重ねるのを見て次のようにいふ。

「旦那様、何て嫌な真似をなさいませぬ。これは他の何よりもいけません。以前のあなた様の方がずっとましなくらいです。私はいつも旦那様のすくいを願つてまいりました。でも今度といふ今度はもう駄目です。これ迄大目に見てこられた神様も、この非道さだけはお許しになりますまい。」

又このスガナレルの他にもドン・ルイ、ドンヌ・エルヴィールが批判者として現われ、ドン・ルイはドン・ジュアンの非行を責め、貴族の身分にふさわしくないことを説き、ドンヌ・エルヴィールは又行いをあらため自らを救うように説くのである。

スガナレル、ドン・ルイ、ドンヌ・エルヴィールにこのように批判されるドン・ジュアン自身はそれではどういふ意見を持つてゐたのだろうか。自分の女性観については第一幕第二

場で彼はスガナレルに向って次のように語っている。

「何だって。お前は最初に出来た女にいつまでもくっついていなくちゃならない、そのためには浮世を思いあきらめねばならぬ、そして他の誰にも目をくれてはならぬというのか。女房孝行なんて愚にもつかぬ名誉を鼻にかけ、一つの恋の中に死ぬまで埋もれ、若いうちからほかの見とれるような別嬪さん達に目をつぶっていようとはいやはやお目出度い話さ。そんなのは真平御免だ。一人の女をいつまでも愛しているなんて馬鹿者のすることさ。美しい女達はみな俺達をとりこにする権利があるんだ。一番先に出会ったのを笠に着て、ほかの女達が男の心を掴もうとする無理からぬ望みを断ちきるって法はない。俺はな、美しい女を見つけ次第ほれ込んでしまう。そして女が男を牽きつけるあの心地よい暴力に手もなくまいてしまうんだ。約束したって何にもならない。一人の女に惚れたからって他の別嬪達を袖にする義理あいはないではないか。俺が見ればどの女にもよいところがあるし、自然のすすめる所にしたがって俺はめいめいに敬意と貢物を捧げるんだ。いづれにせよ、可愛いと思うものに俺はつれなくは出来ないのだ。で、綺麗な女が俺の心がほしいといえ、仮令それが万あるとも俺はみんなくれてやるよ。ところで恋の芽生えそめというものは得もいわれぬ魅力のあるものだ。そして恋のすべての喜びは変るといことの中にある。口説のかぎりを尽して若い女の心を靡かせてゆく、日一日と少しづつ効目のほどを見届ける、情熱や涙や溜息で仲々陥落しない心のけがれの無い羞恥心を打破る。我々に見せるか弱い抵抗を一步一步ふみ越える、操大事と気を揉むのを抑えつけ、自分の連れて来たいところへそっと連れてくる。こうしたことには得もいわれぬ楽しみがある。だが一度ものにしてしまうと、もはやいうことはないし、のぞみもない。すべての情熱の美しさは消え失せ、こうした恋の静けさの中で眠りこむことになるんだ。誰か新しい女が現われて俺達の欲望をそそり、征服欲をかきたてるような魅力を見せつけに来ないかぎりはな。結局美しい女の抵抗をうちまかすほど楽しいものはない。そして俺はこの点では征服者の野心を持っているんだ。絶えず勝利から勝利へと進み、のぞみにあきらめをつけることなど出来ないのだ。俺の欲望の猛烈さを止めることが出来るものなどない。俺には地上全体を愛したい心があるような気がする。そしてアレクサンドル大王のように、恋の征服を拓げるために別の世界があればと思う位だ。」

又ドン・ジュアンの偽善の萌芽は第一幕第三場で後を追ってきたドンヌ・エルヴィールに答える彼の言葉に見られるのであるが、これは第五幕で全貌を現わすものであるから後に述べる。

ドン・ジュアンの不信については第三幕第一場での医学への不信につづくスガナレルとの問答の中に見られる。ここでは彼はスガナレルの問に答えて、天国も地獄も悪魔も来世もそれからお化けをも信じない態度を明かにし、次のようにいう。

「俺の信ずるのは2足す2は4なんだよ、スガナレル、4足す4は8。これなんだ。」

このドン・ジュアンの不信については、このみではなく他の場所でもスガナレルの嘆きの種となっている。

又ドン・ジュアンの瀆神については、第三幕第二場で森の中で会った貧者に金をやって神を呪わせようとする態度に見られる。貧者が神を呪うことを拒み、それくらいならば飢え死した方がましだというと彼は「よし、よし、人類愛のためだ、くれてやろう。」といって金を与える。

しかしその反面彼の行為には武士らしきも見られる。森の中で三人の盗賊に襲われているドン・カルロスを助けた彼は礼をいわれると次のように答える。

「いや拙者があのような目に会えば、貴殿がされたに違いないことをしたまでです。我々の名誉はこうした災難にかかっております。あの悪党共の行為が如何にも卑劣でしたので、お助けしないことは加担するも同然でした。」

しかし第五幕に入ると前にもふれた通り偽善の仮面をかぶる。そしてもっともらしい口調で改心のさまをよそおい憐れな父親を有頂天にさせる。彼はこの偽善について自分の心底をスガナレルに告げ次のようにいう。

「そんなことは今日日ぢゃちっとも恥しくないさ。偽善は流行の悪徳だし、流行の悪徳ならすべて美德として通るんだ。善人の役割は今日演じうる役割の中で一番よいものなんだ。そして偽善者の商売ほどぼろいものはないんだ。それはペテンが尊敬されることうけあいの技術なんだ。たとえ尻尾をつかんだにせよ。誰も文句をいわない。人間の他の悪徳ならすべて批難されようし、めいめいが大ぴらにそれをやっつけてもよいんだ。ところが偽善は悪徳の特権階級で、自分の手で世間の口を抑えつけ、誰からも罰せられずにのうのうとしていられるんだ。奴らは猫をかぶって一味徒党の者で水いらずの仲間をつくる。その一人でもやっつけようものなら、あとの全部をひきうけなくちゃならぬ。誠心誠意ことに当る人だの、心から神様を信じている人だのと、世間の誰しものが認めている連中、こんな連中がきまって奴らにだまされるんだ。たわいもなく猫かぶりどもにだまされ、わけもわからずに自分達の行為をまねる猿どもを支持するんだ。俺が知っているだけでも、この策略を使って若い頃の御

乱行を巧みにおおいかくし、宗教の衣を楯として、その有難い上っ張りのかげで極悪人ぶりを発揮している奴らが何人いると思う。奴らのからくりを見とどけ、正体をつかんだって何にもならない。それでもやはり奴らは世間では信用されるんだ。一寸頭を下げ、信心深そうな溜息をつき、目をくるくると廻せば、それで奴らのすることは世間ではとりつくるえるんだ。この都合のいいかくれがへ逃げこんで俺は身の安泰をはかろうと思うんだ。俺は俺の楽しい暮しぶりを捨てる気なんかない。だが隠れてこっそり楽しもうという寸法だ。たとえことがあらわれても、俺は高見の見物さ、一味徒党が味方になって相手構わず敵として俺の立場をかばってくれるよ。つまりこれが罰をうけずにしたい放題をする方法というもんだ。俺は他人の行為の目附役になり、誰彼なしにきめつけて、文句のないのは俺だけだという顔をするんだ。一度誰かが少しでも喰ってかかったが最後、俺は決して許しはしない。そしていつまでも根にもって怨みつづけてやるんだ。俺は天に代って復讐するんだ。そしてこの結構な口実の下に敵を追いまくり、信心が足りないといってやっつけてくれよう。そして見さかないの信者どもをけしかけてくれよう。この連中ときたらわけもわからずに俺の敵の非をならし、罵詈雑言を浴せかけ、めいめい勝手に頭からねじふせてしまうだろう。これが人の弱点を利用する所以だし、利口な人間はこんな風に時代の悪風に調子をあわすものなんだ。」

この言葉はドン・ジュアンの声というよりもむしろモリエールの生の声だといわれているが、それはともかく、こうして第五幕ではドン・ジュアンは偽善の仮面をつけて、父親を有頂天にさせたり、ドン・カルロスを撃退したりして、「これは他の何よりもいけません。」とスガナレルを嘆かすのである。

このように見てくると、「快樂の飽くなき追求、これに対して加えられる非難に向って自己の行蹟を合理化せんがためのエピキュリズム、その非難の道德的根源である神を否定せんがための瀆神行為、最後に自己の一切の非行を蓋わんがための偽信云々。」として小場瀬氏のあげているドン・ジュアンの性格の分析は大體妥當なように思われるのである。

しかし小場瀬氏はこうしたドン・ジュアンをモリエールが攻撃しているとするのであるが、実際の作品ではどうであろうか。第二幕でドン・ジュアンが海辺で田舎娘のシャルロットに会い、その姿や歯並や唇などをほめあげてよこばせ結婚の約束をして彼女の心を得るところがある。するとそこへこれも田舎娘のマチュリーヌが現われるが、彼女もドン・ジュアンから結婚の約束を得ているので、ここでドン・ジュアンの中にはさんで二人の娘の争いになるのであるが、ドン・ジュアンは窮地におちいりながら巧みに二人をさばいてへこたれな

い。結局用事にかこつけてその場をはづしてしまうのであるが、この第二幕第四場は極めて喜劇的な場面でモリエールはここで腕によりをかけてお客の笑いをくすぐる。しかもその笑いには諷刺的な攻撃的な嘲弄的なかげはなく、いたってゴールの哄笑であるので、お客は思わず笑ってしまう。又第四幕第三場もまた極めて喜劇的な場面で、ここではドン・ジュアンが借金取りのディマンシュ氏を巧みに撃退してしまうのであるが、ここでも又モリエールのかげのない、明るいゴールの哄笑の天才が花開いているように見える。又第三幕第三場で森の中でドン・ジュアンが三人の泥棒に襲われているドン・カルロスを助けるところがあるが、その場合の彼の態度は大変武士らしい。彼は礼をいわれると、それがドン・カルロスとは知らずに次のように答えるのである。

「いや、拙者があのような目にあえば、貴殿がされたに違いないことをしたまでです。我々の名誉はこうした災難にかかっております。あの悪党共の行為が如何にも卑劣でしたので、お助けしないことは加担するも同然でした。」

このように武士らしい点はドン・ジュアンの好感を持たれる点ではあるし、又我々は心から笑う人物を本気で憎めない習性を持っているのである。「タルテュッフ」の場合はタルテュッフが攻撃されているのは誰の目にも明かなのであるが、この場合ドン・ジュアンが憎めない存在として書かれている以上タルテュッフのようにモリエールがドン・ジュアンを攻撃しているかどうかは明瞭ではないのである。モリエールがドン・ジュアンを攻撃したとする立場をとるミシュレもこの点については認めていて、さきにふれた書物の中で、

「モリエールの意に反して宮廷はドン・ジュアンを讚美し、完全な貴族であると認めた。彼は嘘をつく、彼を愛する女達をだまし、絶望させる。涙、それは成功を物語るものである。彼は自分の命を救ってくれた男を打つ……だがそれは百姓である。皆が笑う。彼は勇敢である。それが肝要ですべてをつぐのう。地獄に対しても勇敢で、地獄は彼をのみこんでも何にもならない。彼ははづかしめられないのである。」

だから風教上の効果はなかったように見える。モリエールは打ちそんじたように見えた。彼はドン・ジュアンを卑しめることを敢てしなかった。」

とっている。そしてそれがどうしてドン・ジュアンの原型である宮廷貴族達への攻撃になるかについては次のように

「モリエールはより弱く打ちながらよりよく目的を達したのである。宮廷がドン・ジュアンに示した興味は王をいらだたせることが出来たのみであった。そしてその裁きはそのため

により厳しくなっただけだった。」と苦しい説明をし、ヴァルドの処刑のことをあげている。

又小場瀬氏もその点については認めていて、前にも引用したように、「モリエールはドン・ジュアンにおいて、当代の腐敗しきった大貴族の肖像を克明に刻んだとはいえ、『タルテュッフ』の場合と違って、この喜劇を所謂問題劇にはしなかった。これは宮廷の大貴族を正面からやっつけることは危険であると感じたからであろう。云々」といっている。

このようにミシュレも小場瀬氏もモリエールがドン・ジュアンを攻撃したとしても、その攻撃が正面きってのものではなく曖昧なものであることを認めているのであり、且つミシュレもこの劇を見た宮廷貴族の反応でもそれを証しているように、ドン・ジュアンは憎めない所のある人物としてえがかれているのであるから、我々はモリエールがドン・ジュアンを攻撃したのだとする見解に疑問を抱かざるを得ないのである。

それでは我々はこの点をどう解したらよいのだろうか。我々はその前にモリエールと同時代に生きた宗門側の意見をふりかえって見よう。ロシュモンは1665年に発表された「石像の饗宴と題するモリエールの喜劇に関する意見」(Rochemont; Observations sur la comédie de Molière intitulée Festin de Pierre) の中で次のようにいっている。即ち、

「……宗教をお笑い草にし、放縦な自由思想を説き、神の尊厳を芝居の主人と従僕、一人はそれをあざ笑う無神論者、今一人は主人よりも更に不信な、それで他人を笑わせる従僕の玩弄物とする道化役者の厚顔さを誰が忍ぶことが出来るか。

この作はしかくパリを騒がせ、しかく広範なひんしゅくを買い、すべての善人はために正当な怒りを感じたので、神の栄えが公然と襲われ、信仰が神の秘義を商売の具にし、その神聖さを汚す道化役者の侮辱にさらされ、無神論者が表面では雷撃されながら、実際には宗教のすべての基礎を雷撃し覆す時に、沈黙を守ることは明かに神の立場を裏切ることである…

……………その作に満ち満ちているかほどの罪に何かをつけ加えることは困難であろう。そこには不信心と放縦な自由思想が断え間なく想像力にさし出されているといいうる。墮落させられ、その売春を公表された修道女、神を冒瀆することを条件に人が施しを与えようとする貧者、出会うかぎりの娘を誘惑する放蕩者、父を嘲弄しその死を願う子供、神を嘲弄しその怒りをあざ笑う不信者、すべての信仰を2足す2は4、4足す4は8にしてしまう無神論者、神について滑稽に論じ、わざと倒れて見せてその論議の鼻をへしおる無法者、主人の冗談に馴れ、そのすべての信仰がお化けに帰する恥ずべき従僕、何故ならばお化けを信じさえすれば万事よし、他はたわごとにすぎぬそうである

から。あらゆる場面にあらわれ、地獄のいとも黒い煙を舞台にまきちらす悪魔、そして最後にそのすべてよりも悪く、スガナレルの役を着こみ、神と悪魔を嘲弄し、天国と地獄をもてあそび、ほめたりけなしたり定見なく、美德と悪徳を混同し、信じたり信じなかつたり、泣いたり笑ったり、非難したり是認したり、批難者にして無神論者、偽善者にして放蕩者、人間にして悪魔であるモリエール。悪魔の化身、彼はかくの如く定義される。」

又コンティ公は1665年のものといわれる「演劇及び興行物に関する神父達の意見」(Prince de Conti: *Sentiments des Pères de l'Eglise sur la comédie et les spectacles*)の中で、

「才智に富んだ無神論者に最もおそるべき不信心の限りをいわせた後、作者が神の利益を従僕にゆだね、それを支持するためにあらんかぎりの無作法をいわせている『石像の饗宴』ほどあからさまな無神論の学校があろうか。そして彼は最後に彼が神の復讐の笑うべき代行者たらしめている火箭によって、かくも冒瀆に満ちた彼の作品を正当化しようとする。さらにかくも忠実にあらわされる雷撃が観衆の心に生ずるべき恐怖の強い印象によりよく伴うように、彼は同時に従僕にこのことに関する想像しうるかぎりのたわごとをいわせている。」

といている。

このように宗門側の意見はこの作品を解して宗教への攻撃とみなしているのであるが、この作品の成立した背景を考えると案外正鵠を得ているのではないだろうか。モリエールはさきに1664年5月に「タルテュッフ」を初演して宗門に巣くう偽善者たちを攻撃したのだが、かえって彼らの圧力で公演を禁ぜられ、手ひどい攻撃をうけた。その経緯は彼が1664年8月に王に奉った「第一の請願書」にのべられているし、彼はその中で自分のおちいった窮状をのべて王に訴えている。しかしこの「第一の請願書」も功を奏さず、彼は一座を率いる者として新しいだしものにせまられて1665年2月に「ドン・ジュアン」を出したのである。この作品は非常に難解な作品であって後世さまざまに解釈されているが、これをさきに述べた当時の背景の中において、これが発表された時、宗門側から上に見たような反撃があったことは、この作品の持つ意図を反映しているものといえるのではないだろうか。そして上に見た宗門側の見解は我々の目から見るとやや激越で、文学の理解に乏しいように見えるのであるが、当時の状況を背景として、この「ドン・ジュアン」という作品に対する反応として案外正鵠を得ているといえるのではないだろうか。

それで私の解釈であるが、モリエールがドン・ジュアンをえがくにあって当時の宮廷貴族の姿をかりたという点では小場瀬氏の説に賛成である。彼がこの作品で服装のみならずそ

の行為や性格においても当時の宮廷貴族の姿をえがいたのだとする点では小場瀬氏の説に賛成である。しかしこうしたドン・ジュアンをにくむべくえがかなかった点では宗教を嘲弄するものにとりたい。ドン・ジュアンは作中の人物としては独立した人物であってモリエールが即ドン・ジュアンではないのだが、上に見てきたようなさまざまな悪徳をもつ人物を好感をもてるようにえがいた点、心から笑えるところのある憎めない人物としてえがいた点で、この姿をかりて宗教を嘲弄したものといえるのではないだろうか。そしてこのように解すると先にあげた第三幕第一場でのドン・ジュアンの医者への嘲弄と医学への不信の問題もとけるのである。もしモリエールがドン・ジュアンを好意的にえがいているとするならば、これに自分の意見の一つである医者への嘲弄と医学への不信の意見を与えても別に不思議ではないのではないだろうか。

前にも見た通り、モリエールはこの作品を出す前年の5月に「タルテュッフ」を初演し、宗門に巣くう偽善者たちを攻撃しているのだが、これはかえって彼らの策略で公演を禁止され、あまつさえ手ひどい攻撃をうけた。この事情は彼がその年の8月に王に奉った「第一の請願書」にかかれており、彼はその中で自分のうけた攻撃をその相手の名はあげずにピエール・ルーレの激越な言葉を伝えており、自分の陥った窮状をのべて王に訴えているのであるが、この訴えも「タルテュッフ」の上演禁止がとかれなかったので功を奏さなかったように見える。その余憤が翌年2月の「ドン・ジュアン」となってあらわれているのであろう。

「そんなことは今日日ぢゃちっとも恥しくないさ。偽善は流行の悪徳だし、流行の悪徳ならすべて美德として通るんだ。云々」にはじまる第五幕第二場でのドン・ジュアンの長いせりふは、それがドン・ジュアンの声というよりはむしろモリエールの生の声だといわれるだけに、その言葉の反語的性格とあわせてかえってこのことを証明しているように見えるのである。

このように「ドン・ジュアン」にはモリエールの宗教に対する嘲弄的な態度があらわれているのであるが、これはむしろ彼の正常な態度とはいえないものがある。さかのぼれば1662年の「女房学校」にはじまり「タルテュッフ」で火をふいた宗門との争いという背景の中で、彼の態度がここまで来うることを「ドン・ジュアン」は意味するものであろうが、この問題については又項をあらためてのべたい。しかしこの意味からこの作品は「タルテュッフ」につながるポレミィクの傾向の強い作品といえるのではないだろうか。